



7月 1学期の締めくくり

～本多聞の歴史紹介～

1年生の朝顔が、一つ二つと開花しています。また、中庭の紫陽花も梅雨の雨に打たれながらも色鮮やかに咲いています。早いもので、もう7月。あと1か月足らずで1学期が終わります。6月15日から通常授業となり全校生が揃いました。当たり前のことですが、子供たちの笑い声、元気な声、元気に運動場を走り回る姿が、学校には必要です。各教室では、臨時休業中に失われた授業時間を取り戻すべく工夫した授業が展開されています。特に、どのクラスもICT機器を使用し視覚的に学んでいる様子が伺えます。授業のみならず委員会活動でも、常時活動の内容を全員で把握する時にICT機器を使用している場面も見られました。グループで集まって話し合いをしたり、班で集まって何かを作り上げたりすることが難しい今、学校生活においても新しい生活様式を考えながら授業展開をしていかねばなりません。7月からは、毎週月曜日・水曜日にはお昼の学習が加わります。今までにない登校日数の短い1学期ですが、子供たちの良き成長を願って、「やっぱり学校って楽しいよね」と言って1学期を締めくくれるようにしたいと思います。

さて、このような状況下の中ですが本多聞小学校は3月末で閉校します。閉校に向けて、また、統合校の開校に向けて、滞っていたことが動き出しております。6月中旬には、新校の校名募集がありました。応募してくださった皆様ありがとうございました。決定はまだ先ですが、決まり次第お知らせします。校名だけでなく今後も様々なことが決定されていきます。統合便り等でご確認いただきたいと思います。

今回から本多聞小学校の歴史を紹介していきます。私は、本校に着任して3年目です。本多聞小学校43年の歴史のうちの3年間を過ごしています。保護者、地域の皆様の中には、43年間本校を見守り続けてくださっている方もおられるのではないのでしょうか。ご一緒に振り返っていただければ幸いです。しかし、私は、学校にある資料からの振り返りとなります。もし「あの時はこんなだったなあ・・・」「こういったこともあったなあ・・・」等、エピソードがございましたら、ぜひ学校にご連絡ください。学校に保存されている資料より、「本多聞」という町の歴史をご紹介します。

本多聞のふるさと

S60. 3. 9 学校沿革史 資料より

この丘は、古くは多聞村池の谷といわれ、高塚山(152m 多聞・伊川谷・名谷町の境にある山)の南斜面、湯屋谷・入道谷などいくつかの谷と池のあった山間地でしたが、昭和50年代に入り土地開拓が急速に進められ本多聞という新しい丘ができました。もっと古い時代、この地方は高塚山(多聞)古墳群で、425基以上もの古墳が群集墳をつくっていましたが、残念なことに宅地造成の波にそれらの古墳は消滅しました。多聞寺の大門(第二神明道路のところにあった)を中心に西側を「西脇」、東側を「寺の町」(現在の本多聞1丁目)といい、多聞寺の参詣人相手の土産物店のあった門前町だったようです。湯屋谷は、現在のバス路線で、当時多聞寺に参詣する人は、身を潔めて参詣する習慣があり、湯屋(現在の銭湯のようなもの)が立ち並んでいた谷あいの村であったようです。入道谷(学校の北側本多聞公園に至る坂)は、多聞寺で修養している修験僧達が住んでいたところであったそうです。校区の西を流れる山田川の河口は「舞子の浜」ですが、平清盛がこの浜で巫女に舞を舞わせたことからこの名がついたといわれていますが、その昔は「山田の浦」と呼び、非常に栄えた漁港であったようです。私たちの学校のある町住んでいる町「本多聞」は、こうした歴史に囲まれ古跡豊かな土地です。

開校の年

(昭和53年4月1日 学校要覧より)

1978年 昭和53年 4月1日 本多聞小学校開校

多聞東小学校より277人 多聞台小学校より6名 多聞南小学校より2名 移籍 計285名(入学児童51名含む)
多聞東小学校の過密化により本多聞2丁目～4丁目が多聞小学校校区となった。

多聞台・多聞南小学校からの移籍児童は、その2校に通学していたが、本多聞小学校が新設されるにあたり、新校(本多聞小学校)に通学することになったと考えられます。現在より102名多い児童数で本多聞小学校が開校されたようです。

これからも、学校にある資料をもとに、本多聞小学校の歴史を紐解いていきます。お楽しみに・・・ 小川 優子

